

三河アララギ

平成二十五年

五月号

第六十卷 第五号



ニューヨーク日記(79) <http://blueshoe.copetin.com/>

BlueCat, Shoe Lady

November 22, 2012 : Thanksgiving Dinner

Blue Shoe Diaries



今日はサンクスギビングデーです。私はサンクスギビングディナーってあまり美味しいものだと思わないのよね。七面鳥は大きいしローストするのに時間かかるしその上何か何時もドライ。一緒に食べるスタッフィングも美味しいものに出会ったこと無い。だから家は今年しゃぶしゃぶでサンクスギビング!七面鳥を食べたくないお友達を招いて美味しく過ごせました!

It's Thanksgiving. I'm not a fan of Thanksgiving food. Turkeys are too big and when roasted, usually end up dry, and I never understand what's so great about stuffing. At least I've never had tasty stuffing. So for us, Thanksgiving dinner this year was shabu-shabu! We invited some friends that didn't want turkey and we had a delicious time with lots of wine.

目次

第六十卷第五号(通卷七一三号)

| | | | |
|--------------|---------------|---------------------|--------------------|
| 表紙 マロニエ | 今泉 由利 (1) | ダビデの星(なら花) | 富岡 和子 (27) |
| ニューヨーク日記(79) | Blue Shoe (2) | うつつとして | 白井 信昭 (28) |
| 感銘歌 御津磯夫第十歌集 | (4) | 現代学生百人一首 | 東洋大学 (28) |
| 歌集「スモン」 | 大須賀寿恵 (5) | ことよせ | いーはとぶ (29) |
| アシビの千房 | 岡本八千代 (6) | 私の一首 | 佐藤 喜仙 (30) |
| あるがまま | 今泉 由利 (7) | | 林 伊佐子 (30) |
| 桃の節句 | 弓谷 久子 (8) | | 半田うめ子 (31) |
| 故里 | 青木 玉枝 (9) | | 山口千恵子 (31) |
| 穂乃香 | 内藤 志げ (10) | | 植村 公女 (32) |
| 弥生尽 | 佐藤 喜仙 (11) | 俳句 | 一石 (32) |
| 三月の山 | 林 伊佐子 (12) | | 喜仙 (33) |
| 花祭り | 安藤 和代 (13) | | 皓一 (33) |
| アネモネ | 胃甲 節子 (14) | 子規の短歌革新とアララギの歌人(10) | 佐藤 喜仙 (34) |
| 春への誘い | 伊藤 忠男 (15) | 「歴代天皇御製歌」(十一) | 貫名海屋資料館 (35) |
| 桜花 | 足立 晴代 (16) | ある自然科学者の手記(12) | 大橋 望彦 (36) |
| ホトケノザ | 鈴木 孝雄 (17) | 絹の話(30) | 今泉 雅勝 (38) |
| 老人大学 | 半田うめ子 (18) | 物理学者と詩歌の世界(40) | 一石 (40) |
| 福に | 清澤 範子 (19) | 短歌に詠まれた茂吉 | 鮫島 満 (42) |
| 命 | 近藤 映子 (20) | 楽しい時間(6) | 山本紀久雄 (44) |
| 清水の石段 | 伊与田広子 (21) | 贈呈誌 | 夏目 勝弘 (46) |
| 少し慣れたり | 杉浦恵美子 (22) | 「鍼の如く」 其の一 | 岡本八千代 (48) |
| 五角形 | 平松 裕子 (23) | 「水魚」のことから(148) | 今泉 由利 (49) |
| 南部ごはん釜 | 山口千恵子 (24) | ことのはスケッチ(413) | 編集室だより(二〇一三年三月) |
| 朝光 | 小野可南子 (25) | | 和菓子街道(79) |
| 五本指の靴下 | 夏目 勝弘 (26) | | お知らせ・編集後記・三河アララギ規定 |
| 百寿を | 阿部 淑子 (27) | | 平松 温子 (52) |

感 銘 歌

御津磯夫第十歌集 「御津磯夫歌集」

小鳥らの声をききつつまたしばし吾はまどろむ春はあけぼの

P
31

煌きらめきにわれ浸りをり咲きあふるるさくらの花の逆光の中

P
34

歌集 「スモン」

大須賀寿恵

街灯に吾が影ながき駅前広場早番の日のいたく耳冷ゆ

朝より降り出でし雨に胸痛む肋とりて既に十年を経し

事務室に置く観葉植物のとりどりに集りふえて今二十鉢

アシビの千房

蒲郡 岡本八千代

北風は北より吹きて音たつる二八にっばちの風かとおもひつつ眠る

ゼロ歳は二歳となりつつ我らをば「おほぢいおほばあ」とかいふらしき
しほりたてのミカンの原液をいっきに飲む己ひとりのこの春の夜半

ひとりなばたった一膳の箸洗ふこの当り前が今夜は不思議

テレビより震災追悼の鐘が鳴る何と言ひても諸行無常ねの音

そそくさと顔を洗ひて薄化粧われの仕ぐさのああ何十何年か

手櫛にてわが白髪を梳きにつつ夕べの買物に家出でむとす

紅アシビ白きアシビの花の房千垂ちたりちふさ千房にゆれてをりけり

なにとなし寂しかりけりくれなると白きアシビの花のゆれゆれ

何事も来年のことはわからざりアシビの花の千房のゆれゆれ

あるがまま

東京 今泉 由利

刻まるる月のリズムか正確にひとつ小さく欠伸の出づる

一年に三・八センチづつ遠ざかる今日の三日月鋭く光る

ひとつ目の花綻びぬ桜並木円空仏に会ひにゆく道

あるがまま散りくる桜の花びらのひとひらひとひら描き重ねる

雨はゆき風も吹き止む花曇り今日の集ひは桜木のした

吉宗のはじめし桜の園にしてメール打ちをり桜見に来よ

眼鏡掛け見えはしないニュートラリーノ心の中に見えつつるたり

おのずから微笑となる私も鈍なたとのみとの木っ端仏像

三楹に導かれゆく登りゆく身延山の雲にわけ入る

ただに白雲の中にてただ白を写さむとするシャッターの音

桃の節句

豊川 弓谷 久子

大粒のあさり届きぬ早朝の魚市場にて買ひ来て呉れし

ささやかに桃の節句を楽しまむ幡豆の海にて採れしあさりに

びっしりと馬酔木の花の咲き盛る箱根の旅を憶ひてゐたり

果せざる小さき夢は夢のまま我が胸の中それもよきかな

畑隅に生えゐる土筆摘みて来て我に呉れゆく手に余る程

ほろ苦き味楽しみぬ春の味夕餉の膳に土筆の一さら

雀等に混じりて今日も我が庭にパンを啄ばむ野鳥が一羽

関ヶ原安土桃山めぐり来しと旅の土産がみさとより届く

目の前に桜の御津山はるかには御堂山かすむ今日もつつがなし

春日和寒の戻り日春嵐あわただしくも弥生月過ぐる

故里

新城 青木玉枝

伊丹を出でこの山里に一年余寒さは二度目格別なりや

今更に悔いてもおそい日びなるに幼なのわが顔卒寿のこの皺

イノチ、いのち、命と書きて愛しみぬ季の流れをふり返りつつ

山里にも春の訪れみゆる朝土手に見つけたたんぽぽの花

春告げる土手の枯径にたんぽぽの黄の色見つけ手押車ておしを止める

花桃の裸木の枝に花芽出で春のしだれの美しき朝

外出はマスクなしでは歩かれずマスクと仲良くひと日暮れゆく

人の声も足音もなき山里に週一回のデーの日を待つ

あの山を越ゆれば故里三河湾海の匂ひがあつた砂浜が

テレビにて写し出される名所幾つ皆旅をしたなつかしき所

穂乃香

豊川 内藤 志げ

予報では明日は朝から雨となる玉蜀黍の種の催促

待ち待ちし種の届きぬ一反歩の玉蜀黍を半日にして

マルチング嫁が引きゆき二人して鋤を振りつつ据への土を

種蒔機にテープ通すも嫁は慣れわれは畝の端に腰を据へ待つ

自転車にて四十分の高校を運動苦手の穂乃香は選ぶ

丑年の九月に生れ名は穂乃香圃に囲まる高校を選ぶ

入学の祝の食事乾杯と夫の掛け声グラスが五ついっ

描かれる椿の枝をまじまじと虫に欠けたる一葉もありて

わが椿一株のみが早く咲く荒ぶる風に花片黒し

市場にて玉蜀黍を競ひしに同年の人の葬の札が

弥生尽

東京 佐藤喜仙

咲きほこる諸花なれどその色香失せゆくごとし桜満つれば

早朝の日差しを受けて初桜見あぐる犬もまぶしげに見ゆ

揚雲雀光の点となりてなほ空の奥へと奥へと昇る

国宝の鐘の音響く古都の里茶屋に座りて草餅とうぶ

真白き巨塔のさまに白木蓮都心の苑に齡を重ねる

敷き詰むる人工芝の野球場淡き春雪積もり初めをり

春の海浮子は静かに上下する見つむる我の目は借られゆく

枯れ残る莖の根方の土もたげ古きを凌ぐ新芽萌え出づ

ランドセル机の上に飾りをき昼夜眺む入学近し

この月は何かにせかれ矢のやうに日々を重ねてはや弥生尽

三月の山

岡崎 林伊佐子

風が立ち杉の花粉が渡り行く春まだ寒き三月の山

体力に合せて山坂のぼる時落ち枝ひろい杖突きて行く

山に来て樹の間にもれる杉花粉飛散してくる野良着の上に

頬被りしながら夫と椎茸の櫓木組みゆく心晴れやか

としどしに鶺鴒が一羽鳴きながら働くわれに近寄りてくる

インコの餌こぼせる朝なさな雀らは友を呼びつつ軒に集まる

長生きの素は短歌と畑仕事自由気ままな老いの生活

失聴となりたる吾と五十年棲みたる夫も寂しくあらむか

あの世まで添ひとげゆかむと失聴の吾を励ます夫のゐませる

子も孫もひ孫もありしわが幸を彼岸の墓に父母に告げたり

花祭り

豊川 安藤 和代

「テーホへテホへ」鬼が踊れば私も身ぶり合せて花祭りの夜

バチさばき見事にそろふ若者の長篠太鼓は暗やみに響けり

鬼のまくお湯にかかれば無病息災友と丸まりお湯を浴びたり

花祭り離れて空は十三夜月と星とが澄みて輝く

ロスアンゼルスに留学決まる孫とみて心配つのおだやかならず

孫の夢についてはいけず疲るるも孫喜べばよしとするべし

秘めし悲話聞く六地藏苔むして台座に春の陽のやわらかし

折にふれしみじみ思ふ祖母の里椿の花に染まる林道

畑隅の取り残されし大根に白き花見ゆ祭りも近い

満開の桜の季に父逝きてそれより吾は花にうかれず

アネモネ

豊橋 胃 甲 節 子

見上ぐれば強風荒るる青空に庭の桜は今日咲くピンク

予報では寒の戻りとゆふ寒さ胸の奥迄寒きよ今日は

裏庭に来たる鼯は暫を見廻したる後駆け下り行く

明日無きと言はれつつ吾生かされて今年の桜咲くを待ちをり

籠りゐて気付かぬうちに沈丁花豊かに香りて咲き満ちてをり

唯でさへ浅き眠りを強風は夜通し激しく雨戸打ち続く

花びらは柔かく小さきフリル持ち初めて咲きたる白き椿よ

吾が庭に初めて鶯啼く音聴く此れより日毎鶯待たむ

日の過ぐる速さは今日の予定さへ即ち叶はずすぐに横たふ

花の名がアネモネだったと厨にて夕餉の支度しつつ気がつく

春への誘い

大阪 伊藤 忠 男

如月の役目忘れし月晦日春の兆しは何ひとつなし

如月の寒さ堪える残り冬微かに見える雪解けの日が

病室を離れ春の日我が身にも花の便りの届く日近し

指かざし気がかりなりや西風にマスク探しに家に戻らん

節句にも飾れぬままの桃の花咲くためらうまだこの寒さ

花祭り祝うに難し今少し我慢の二字を噛みしめる朝

突然の電車停止に苛立つも事故の一報またも悲劇か

来ぬ春に心は暗く腹立たしそんな気持ちも後二日なり

やっと春手に取り愛でるタンポポに菜の花スマレ名も知らぬ花

春や春今年の春はまたとなし我の喜び誰に伝えん

桜花

東京 足立晴代

萌え出づる樹々に息吹きに人はみな生きる力を思ひいだせり

雪の降る野山もあるに春来たり花咲き香る町もあるかな

桜花色の濃淡美しく吹く風やわと春のひとつき

桜花映る水面みなもに集う鯉花見つどの客ものぞき見るなり

桜花様々に色あり名ありはじめて知りしはバラ科なりと

お花見に集いし人も多かりき老若男女同じ思いで

弥生空桜の蕾開きをりあわてふためく花見ひとつと

早咲きの桜のつぼみ開き初ひらむ待ちあぐみたり待ち焦がれたり

朝夕に寒さありてもものかわとひらきし蕾のかわゆかりけり

昨日まで健すこやかにし君きみなるに床伏ふす日々に桜の花を

ホトケノザ

沼津 鈴木孝雄

沈丁花香りで奥さん呼び戻す奥さんの笑顔久しぶりに
歩道脇こんな所にハコベラが白い花つけ健気に生きる
ホトケノザ花卉は互いに高く伸び仏の道を守りけるかな
青い空白い富士黄いミモザ春を迎えるさあ揃い踏み
うぐいすの初鳴き麓の木々渡り花咲く山に春訪れる
広い畑自転車止めて寄り添える若い二人に幸せ祈る
春風に富士もかすかにかすみ見え今年は気になるPM二・五
この春は何故か鼻水垂れ止まず花粉症には免疫のはずが
振替わり優勢だったがかわされて星目なのに未だ師に勝てず
控訴審いよいよ明日は判決だ験をかついでかつ井食べる

老人大学

新城 半田うめ子

なつかしく思ひ出すなり滝の湯へ行きにしかの日の老人大学

楽しみて湯につかり居り滝の湯の親切なりぬグランドホテル

夏蜜柑多くなり居り小鳥等のにぎやかなりぬわが横の畑

貰ひたる前原様より菊芋の味のよくして楽しみて食む

スベリヒユ教師より頂きぬ若者は取りて行きたり大切なるを

西川の川辺を歩く少しづつ咲きてゐるなり蓮華草の花

朝陽の出で来^きたるなり川辺にて食^きみたく思ひてつくしを取りぬ

咲き居りし木蓮茶屋白き花知多へ行きし日を思ひ出すなり

庭中にはらはらと舞ふ紫の木蓮の花美しきかりし

福に

春日井 清澤 範子

苦しみも福に変わる思ひして辛きも幸せと思ひ暮さむ

寒の日に逆もどりなり風強く廊下より椿の花芽を捜す

血圧の高き夫なり医院にてセーターを幾枚も脱ぎて測定

澄みし空を見上げ神社に詣で来て一拍遅れの吾の柏手

美容院へ来れば笑顔の美容師に腕ささゑられシャンプー台へ

病院へ夫と電車に乗る今日は小旅行なりパック茶呑みつつ

啓蟄の朝なり神社の境内に雀ついでばむ虫は何かと

吾が庭の貝塚伊吹屋根を越す二年振りに庭師を頼む

狭瘁症の手術をしたる吾が夫は庭の剪定を業者に頼みぬ

半日をかけ庭の剪定は終りたりその出来ばえは夫六〇点と

命

名古屋 近藤 映子

八階の居間に置きありダチュラの小鉢芽を出しはじめ葉を出しはじめ
如月末霜立つ路面のサクサクと足先ちぢむ冷え強し

夫見舞ひ入院継続手続を終へたることをそつと伝へぬ

わが夫の発熱続く如月末面会も成らず心配の日々

春雨と言ふには寒し弥生月手作りしじみ雛ケース飾りて

中国の大気汚染は我国にも押寄せ来たる心配ニュース

ニュースにて北京の空の濁りたる目前に見ぬ汚染の実況

はや弥生中葉なれど朝夕の冷えは冬日と変らず

我夫の又発熱に院長より大病院への対応を告げらる

転院したる我夫は熱降り来れば吾をじつと見詰めぬ

清水の石段

豊橋 伊与田広子

バス旅行隣に坐りしひとは話相手となりて楽しき

清水の石段昇るは危ぶなかし石段昇らず下にて待つ

太き綱われが振るとも鐘鳴らず八坂神社にてお参りをする

あらためて体力のなさをなげきたり若き時より老いてますます

ふわふわの毛皮の敷布注文す寝心地良きを楽しみに待つ

久しぶり豆腐屋のラッパ聞こえて我が家の前を通り過ぎ行く

図書室にて勉強しをりしに豆腐のラッパに家に帰りし思ひ出

わが前の中学校は海拔は七米と市では云ふなり

わが住むは海拔六米と思はる津波は三河湾より来ると云ふ

地震には我家の無事であるならば二階に上がり居るが良きかと

少し慣れたり

蒲郡 杉浦恵美子

誘はれて半田の街をそぞろ行く十ヶ川じゅっか沿ひ春未だ浅し

こんなにも数奇な運命あるものか我が身の不運も薄らぐほどに

哀しみを秘めたる人のこの笑顔胸を衝きたり我が身と思ふと

この人が私を選んで語りたるそのこと嬉し重く受け止む

わたしにはなんにもしてはあげられぬあなたの哀しみ受け止めるしか

二年目の変はらぬ春がやって来た夫の不在に少し慣れたり

自筆遺言筆の字二画抜けて居りその期の夫の心根哀れ

何時か要る思ひてせつせと切り抜きて忘れ去りたる興味の断片

大切に仕舞ひし教材未練なく捨てる気になる退職満二年

またひとつ我が居所を見付けたり専称寺にて合唱練習

五角形

豊川 平松 裕子

キャベツ畑の畔一面の白き花ノミノフスマにも春は来にけり

東に向へる我の前にあり三月尽の月はおぼろ月

前になりて後になりて横になりて走りゆく我を月は見守る

闇に青く美しきランプ点しゐる大型トラックの後をつきゆく

五角形の稲荷寿司を作らむと思ひたちたり一月八日

心意気は買ふよと言ひし人達に作りて見せむ五角形のいなり寿司

電話帳を車に持ち込み片端から豆腐店に電話してをり

我が注文受けてくるる人はなし術無くしばし車に眠る

我が手にて作る他なしかつて世にあるはずのなき五角形の油揚げ

今日もまた思ふやうに油揚げは五角形にはなりてくれない

南部ごはん釜

豊川 山口千恵子

鶯は確かな声に鳴きてをり庭の紅梅白梅盛り

わが庭に幾朝来鳴く鶯の今聞く声は確かな鳴き声

山茶花の花びら松葉入り混じり風に吹き寄るわが門口に

ブロックの塀の内より香りくる隣家の大株沈丁花の花

仕舞ひるし南部鉄釜に飯炊かむ二人の夕餉の白米二合

鉄釜に二合の米を炊かむとす水加減確かむ説明書に

ふつくらと白しろつやつや炊き上がる仕舞ひ込みるし南部ごはん釜に

かつて戦ありしは教科書しゅくこのみに知るハノイの戦争記念館見て来しと

ベトナムのみやげに貰ひし一缶の蓮の実油に揚げし菓子

祠られしホーチミンを拝み来て私は死んだら火葬にされたいと

朝あさ
光かげ

豊川 小野可南子

朝靄のましろおだしき朝の道音羽の川に沿ひつつ行きぬ

我が庭の植え込みの間を飛びめぐる紋付き鳥のその紋の白

菩提寺に春は来にけり朝光あさかげに白木蓮の真白輝やふ

白と黄との水仙たばねて供華とする一氣に春となりたり今朝は

我の目に信号の青定かならず春の霞かはたまた黄砂

淡紅の乙女椿のひとつ花我が挿し木して三とせを経たり

潜みゐるヒメダカ幾つ放しやる新らしき水春色の水

自づから後手に組み歩む影地に黒々と私が歩く

ものなべて左の耳より聞こえるややに慣れつつ三度目の春

おだやかに笑みたまひたる寿恵先生の御影を見上ぐしばししばらく

ユタンポに復また湯を満たすこのゆふべ明日の朝けは霜降りるとか

五本指の靴下

豊川 夏目勝弘

なんとなく気になりゐしは昨年より五本指ある靴下買ひぬ
穿かぬまま引出しのなか寒き今日ふと思ひ出し取り出しにけり
なかなか小指薬指が納まらず時間なきに今日はやめたり
家に居る今日とは再び五本指の靴下はくにとりかかりたり
我が小指なんといふ頑固さよ手もて指を開きて納める
家内を少し歩けばたちまち小指薬指ぬけてしまひぬ
二度三度洗濯すればなんとなく靴下足に馴染みきにけり
小指のみ常に抜けてぶらりぶら我は盲腸切り取りてなし
五本の指すべて納まらなくてよし小悟を得しと一人うなづく
親指のみ入れてあとはぶらりぶら家居の一日すごしてゐたり

百寿を

横浜 阿部 淑子

春爛漫桜の花に満たされて幹も小枝もただ愛おしい
桜花季節を知りて咲きはじむ思い出の桜よみがえりくる
病身の友を誘いて境内へ見上げる桜青空に映ゆ
退院を許され帰りゆく道の桜並木に我を祝えり
エーゼット百寿を迎える君なれば皆で折りたり折鶴のレイ

ダビデの星(にら花)

東京 富岡 和子

青空に白し白し白木蓮は肩車の男児片手を伸ばし
ムスカリとダビデの星とデージーと私も共に朝日を浴ぶる
花冷えの今宵まんまる朧月散る花びらに甘酒飲まむ
久びさの春の日の午後訪ね来し友との話は春の花々
車椅子の友を見舞えりケアハウスやさしい頼もしい介護士に会う

うつつうつつとして

豊川 白井 信昭

日めくりは昨日のままに玄関にうつつとしてはがされぬまま
北角に荒れ木のままに雪柳芽吹きはじむる季になりたり
道端に冬なほ青める草々の上を歩める朝のひととき
御馬に住み幾年過ぎしかせせらぎ聞こゆ音羽川土手

現代学生百人一首

東洋大学

やつとだよもうすぐ会える友達と髪切ったかな日焼けしたかな
コロンビアインターナショナルスクール六年 小 峰 未 来

澄んだ川ささ船そつと置いてみた儂く終わった小さな旅路

コロンビアインターナショナルスクール六年 長谷川 莉沙

ぎんなんがぼとぼと落ちる足元に見上げてみれば色づくいちちよう

奈良県立西大寺北小学校六年 古 澤 舞 衣

もようまでしまに巻いてる貝ひろい海のかけらとポケットにいれた

福山市立南小学校五年 中 田 光 紀

『いじよせ』

(西浦公民館 いーはとぶ)

メジロらは今朝も椿の赤き花につどひて一つはさかさになりて

山崎 俊子

寒中に老いも若きも皆出でて初午まつりの今年も幟立て

牧原 規恵

この集ひあと幾度か思ひつつうかららと交はす今宵の御酒

三田美奈子

ホームにて電車待つ間この寒さプルタブ開けず両手に包む

稲吉 友江

小浜島サトウキビ畑の海の風私の背を吹きすぎにけり
こはま

鈴木美耶子

如月の余寒の今朝に雛飾る嫁と見たてしニューフェースの雛

吉見 幸子

八重咲きの紅梅「不老」は四百歳今日は友らとその木の庭に

牧原 正枝

一年生背に大きなランドセル大きくゆれつつ走りゆくはや

岩瀬 信子

この道の梅の古木は伐られたるもはや若枝に小さき蕾が

石田 文子

私の一首

大雪に秋は早かりナナカマド深紅となりて山肌染むる

佐藤 喜仙

中学一年・二年生を北海道の帯広から入った足寄^{あしよ}という町で過した。この町は大雪山を主峰とする石狩山地の裏側に位置する為、降雪量は少ないが寒さの厳しい土地である。楽しみと言えば家族旅行で、夏は阿寒湖へ、秋は石狩山地の紅葉を見学につれていかれた。その折の大雪山のナナカマドの朱の鮮やかさは今だに眼に残っている。三河アララギに載ったこの歌を読んだ時しまったと思った。「大雪」は「大雪山^{たいせつ}」とするべきだったか。

歳末の山家の庭に羚羊の足跡凍てつく霜解けの泥に

林 伊 佐 子

歳末に帰省した時、霜解けの庭に羚羊の足跡が残っておりました。好物の「青木の熟実を食べに来た。日本羚羊は、天然記念物に指定されていますが作物の被害も多く銃殺されるようになりました。過疎の村は獣達と共存する生活です。動物の好きな私は、態度とか表情とか気にしながらまともならず平凡な一首となり反省しております。

散歩する友の後より緑なす日吉の山へ杖をつきつつ

半田うめ子

日吉の山の中に温泉があります。市の無料経理にて、入ってたの楽しく又、道の辺には種々の花が咲きて居り杖にすがつての友達との楽しみの幸福です。

山清水細く流るるやさしき音鯉は動かず寺池の底に

山口千恵子

初詣に家族で出かけた時の一首です。賑わうおみくじ売場の脇を通り抜けて、山側の少し濁りのある池を覗くと、じっとして動かない数尾の鯉が見えました。

山から流れる一筋の細い水が、チロチロと、微かな音をたて、その池に注いでいました。何となくやさしい気持ちになり、しばらくその池の端に佇ずんでいました。

静かな山間の寺のたたずまいを伝えられたらと思います。

『俳句』

亀鳴くや私の地軸すこしずれ

植村公女

つくしんぼ総立ち関東平野かな

ぶしつけに覗いてゆけり吊し雛

水分子飛び交う中の朧月

一石

眠りから目覚める山の笑ひかな

循環は生命の仕組み春の雨

大川に江戸の名残りや朧月

喜仙

散策の歩数の伸ぶる雨水かな

溪流釣魚籠の中には露の臺

山道も散歩の道もすみれかな

皓一

吹雪くため散り積もるため桜かな

のびやかに川に枝垂れる桜かな

子規の短歌革新とアララギの歌人 (10)

佐藤 喜仙

(三) 歌よみに与ふる書

明治二十九年

正月、秋山真之が三年ぶりに訪ねて来る。半日閑談。一月三日、子規庵にて初句会をひらく。参加者は漱石、鷗外、鳴雪、虚子、飄亭、碧梧桐その他数名。四月から十二月まで「松羅玉液」を、五月から九月まで「俳句問答」をそれぞれ「日本」に連載する。その間をぬって五月雨のころ、一泊で板橋、赤羽方面に旅行。七月、八月、「我が俳句」を雑誌「世界の日本」に寄せている。秋には目黒や船橋方面に小旅行をし、仲秋には上野元光院で明月を鑑賞する。十二月になり松山の柳原極堂が俳句雑誌「ほと、ぎす」発行のことで相談のため上京してきた。この年蕪村著「新花摘」に感動し、俳句表現において写生と平淡とを結びつける運動を始める。

明治三十年

一月に松山より「ほと、ぎす」が創刊される。子規は

二号、三号に「俳諧反故籠」を連載する等全面的協力を惜しまなかった。執筆活動は相変わらず旺盛で、一月〜三月「明治二十九年の俳句」、二月〜四月「俳句と漢詩」、四月〜十一月「俳人蕪村」を「日本」に連載している。一方結核も進行しており、腰痛は結核性カリエスが原因と判明し少なからずショックを受ける。三月に手術を受けるが、その後はかばかしくなく、九月には腰と背骨近くの二カ所に穴があき、膿汁が流れ出るようになる。腰痛が激しく歩行困難となるが、そんな中十二月二十四日には子規庵で第一回蕪村忌を開いた。現存している写真を見て参加者は二十名と盛会であった事がわかる。

明治二十六年から同三十年までの子規の活動を足早に見てきたが、この間病状の悪化にもかかわらず子規の執筆意欲は一向に衰えていない事がみてとれる。蕪村の句に新機軸をみい出し、その実践と普及に取組む姿には子規らしい面目躍如たるものがある。

明治三十一年の一月十五日には、子規庵で蕪村句集論講の第一回が開かれる。(三十五年まで続く)俳句革新の基盤が定まったとみるや子規は短歌革新にのりだすべく同年二月十一日から三月三日まで「日本」に「歌よみに与ふる書」を発表した。

「歴代天皇御製歌」(十一)

貫名海屋資料館

『じよめい舒明天皇』 第三十四代 在位六二九年(三十七歳)―六四一年(四十九歳)

舒明天皇は、第三十代、びたつ敏達天皇の孫。この御代に遣唐使の派遣がはじまる。

小野妹子と共に隋に派遣されていた高向玄理、南淵講安が唐から帰国し、彼の学問、技術を日本に伝へ…大化改新への原動力となった。

大和には 群山あれど とりよろふ 天の香具山 登り立ち 国見をすれば 国原は
煙立ち立つ 海原は 鷗立ち立つ 美し国ぞ 蜻蛉島あきつ 大和の国は

大和には 山が沢山あるけれど とりわけすぐれた 天の香具山 山の頂に登り 領土を見渡せば 人家
の炊煙など 舒明天皇の頃大和郡山あたりは湿地帯であった 蜻蛉島は大和の枕詞

夕されば小倉の山に鳴く鹿はこよひ鳴かず寝いねにけらしも (万葉集、巻第八、秋)

夕方になると、小倉山で鳴く鹿が、今夜は鳴かない、もう寝てしまったのかなあ

ある自然科学者の手記 (12) 大橋 望彦

平成25年4月1日記

『小説の意味』

テレビ番組『サワコの朝』という阿川佐和子の対談番組で、芥川賞作家の小川洋子女史の話が面白かった。

その一つに『全部読み直した時に、全部これを私が書いたのだと感じた小説は、失敗作です。』というのは、何となく判る気がする。まるで他人が書いたものだという感じは、自ずからその内容を納得しているのではないだろうか。「小説家は、観察者であり、自分でない者がこれを書かせていると感じるのが一番幸福である。」とも云っている。また、「心を描写するのには、表面しか表現することが出来ない。『寂しい』ことを表現するのに、寂しいという言葉だけでは表現出来ない。そういう矛盾を人間はやっている。」全くその通りだと思った。

理科系の小説は面白いという。最初に新田次郎の次男

坊で、奇抜な数学者の藤原正彦氏の本を読んでからスタートしたそうである。そして、顕微鏡を覗きながら、細かな人間の形を捉えその神秘を感じている。然し、小説を書く段階では、結局は自分で書いたものが、自分の思うようにならず、ラストシーンは始めに決めていたようにはならず、結果がどうなるかは自分にも判らなくなって、それに興味を感じる。その支離滅裂さを自覚して面白がるところが気に入った。これこそ正に科学の世界でもあるからだ。仮説を設けて実験したのに、全くその仮設が違っていたことが判ると、極めて重大な発見と喜ぶ数学者と同じだからである。

更に、『アンネの日記』で感心したことは、自分を唯、日記の形で写し出すばかりでなく、あるストーリーを作り、その中で主人公に託して、自分を客観的に見ることが出来るという事を、そのまま小説に書くという手法を教わったそうである。小説の作家とは、随分ややこしいことを考えねばならないんだなあと感じ入った次第である。

小説を書く時と、読む時とは、人間の心は本当はどのようなのが判らない事がある。書いた人が思っている意味が、読む人の心理、環境条件の違いで、異なつた意味に受け取られることがあるからで、それであるからこそ面白いとも思える。不思議なことに、そのような効果を予測して書く小説も当然あるが、その予測が外れた場合のことは、作者も判らないということの小川女史も白状している。そうだとすると、年々行なわれている芥川賞とか、何とか賞という審査員の判定基準とはどんなものなのか、何人もの審査員がそれぞれ判断して、結局決めてしまうのであるが、実のところ、作者の意図したこと以外の点で評価される場合も十分あるように思える。そうになると、作者にとっては意外な結果であり、その評価は審査員の作成ということに他ならない。こんなので、意味があるのであろうか。でもイベントとしては行なわれなくてはならないのであろう。こういうのは、実は小説より面白い。人間の曖昧さが滲み出しているようだから……。

小説は、その人間の曖昧さの機微を強調する事も出来る。それが、作者の『狙い』となつているとも云える。然し、ニュースや、ドキュメントの記者の書いたものと違うのは、その『狙い』どころが作者によつて異なり、読者はその『狙い』の標的に上手く嵌つた形で、素直に受け止められてしまうことが多い。こんな事をニュース記者が行なつたとしたならば、どうなるであらうか。『事実は小説よりも面白い』などとよく言われているが、そう思つて受け取っているのは、素直にニュース記事をフィクションのないドキュメントとして受け取っている読者を対象としているからである。ニュース記者が『これは事実です』と云つてフィクションした内容を伝えた場合を考えると、空恐ろしい。いわゆる流言飛語に相当してしまふ。小説が持っている伝家の宝刀を使つてしまふと、その影響は甚だしいであらう。小説は小説として、ニュース記事はニュース記事としてその本道を外さないでいて欲しい。

絹の話 (30)

「アトリエトレビ」今 泉 雅 勝

タサール蚕（野蚕）という絹

タサール蚕は東北インドに棲息するヤマムガ科の絹糸昆虫で樫の系統の葉を食べて、森の中で育ちます。

巷でインドシルクと云われている様ですが、学会でも、業界でも使われていません。同じ様な言い方にタイシルクが有ります。

良く知られている白い繭を作る蚕はカイコガ科で一般に家蚕と言われ、桑の葉を食べると大きな違いが有ります。他の虫が桑の葉を食べると血糖値が下がり動けなくなつて死に至ります。（人が食べると高血圧に良い自然食品ですので、桑茶など健康食品としてお勧めです）

△自然の営み、生き残り術▽

虫達は生き残る為に木の葉の匂いで自分が食べられるかどうか識別する犬より遥かに繊細な匂い感知装置を備えていて、タサール蚕などは自分の居る木の葉が食べ尽くされると、夜半、匂いを頼りに、よく茂つた木に集団移

動します。これは虫達にとって大変危険な旅です。木の下には夜活動するイノシシなどが待ち構えて捕食します。樹上にあつては野鳥の絶好の餌となつてしまうので虫は体色を葉の色と同じグリーンにして保身しています。繭を作る直前には虫の体が絹蛋白で一杯になり透き通つて来て、猿などの樹上動物の大好物となります。

その様な試練を超えて生き残つたものがやつと繭になります。インドの夏は気温50℃ともなり食べる葉が枯れてしまうので、繭は保護色と遮光の為、タンニンと石灰分を含んだ焦げ茶色になります。光の当たり具合で各個体の濃淡が微妙に違つて来ます。他にグレー、オオド色なども有ります。繭は小さなアケビのようで、楕円形繭を木の葉と同様、木の枝にへたを作りその先に作ります。繭層は非常に固く鋭利な刃物でなくては切り開く事は出来ません。繭を作っている糸は太く家蚕の2倍から5倍もあります。糸の形状は家蚕が三角のお握り型に対してやや扁平な台形で、強い光を乱反射させ温度の上昇を抑制しています。さらにやつと目視出来る細い1本の糸の中に200前後の孔が有り、その孔の片側に繊毛が密生し、紫外線等を限りなく吸収してしまします。恐らく蛹

の生存に不都合なナノレベルの波長を吸収して他の無害なエネルギーに変換してしまっていると思えます。

陸上生物でこの様な機能を持つものは他に見当たりません。(そうであれば電磁波や放射能対策に役立つ大変な発見になるかも知れませんが、ただ人工的に作る事は現在では不可能です)

また抗菌性、防臭性、難燃性、緩衝性に優れ、保湿性や保温性に優れる一方、一定の温度や湿度を超えると放湿、放湿機能に変化する実に見事な自然界の省エネ素材です。

繭は蛹が羽化するまで保護する揺り籠です。タサール蚕は生き残る為に羽化する期間がバラバで1年以上にも及びます。さらに羽化する時間帯も日暮れ、夜半、払暁に分散し、一斉に羽化して天変地変などで絶滅する事を回避し、種の保存を計っています。

△美しいシャンパンゴールドの糸▽

一口にタサール蚕と言っても大小、色、様々で28種に分類されていますが、まだまだ未発見のものがある様です。この虫は兄弟ほど近い種に日本の天蚕(グリーンの

繭)中国の柞蚕(薄茶)が有ります。

英語ではインドタッサー、ジャパンタッサー、チャイナタッサーと言われ、精練すると区別がつくにくいほど似ています。多孔質など糸の構造や機能性もほぼ同じです。

繭から糸をあげた時は糸はセリシンと云うニカワ質の保護幕に覆われているので、麻の様にごわごわで艶もありません。お米を精米して、なん分づき米かにすると同じ様に精練して目的の柔らかさや艶の有る糸を作ります。

精練された糸は家蚕のそれより少しシャリ感があり、吐かれた糸に所々節があるので、何となくザラツとしたワイルドな凹凸感をかんじます。実はこの構造が当たる光を一層乱反射させ、糸の中に有るタンニンの茶色をうすい黄金色輝かさせるのです。この輝く色を私は「シャンパンゴールド」と名付けました。これは真珠の輝きと同じです。真珠の成分も絹と同じですから!

ワイルドで凜として品格のある色は染めない生成りか実に美しい!草木で染めると染料の持つ色素が輝き生成りとは一味違う別の世界が広がります。

物理学者と詩歌の世界 (40)

一石

カルロ・ルビア

カルロ・ルビア (Carlo Rubbia、1934-) はイタリア出身の実験 (素粒子) 物理学者。父親は電気技術者。ピサの Scuola Normale を卒業。M・コンヴェルシ (M・Conversi) の指導下で宇宙線の研究。1958年博士号を取得後、渡米しコロンビア大学でミューオンの実験に加わる。1960年、ヨーロッパに戻り、ジュネーブ郊外に新設されたばかりの欧州合同原子核研究機構 (CERN) で弱い相互作用に関する実験を行った。1970年にハーバード大学の教授になったが、ヨーロッパとの間を行き来してCERNでの仕事を精力的に続けた。1976年に陽子と反陽子を同一のリング中で加速するスーパー・プロトン・シンクロトロン (SPS) の建設を指導 (注1)。

SPSは1981年から稼動し、1983年1月にUAI 検出器で電弱統一相互作用 (注2) を伝えるWボソンを発見した。また2ヶ月後には同様にZボソンも発見した (注3)。巨大なUAI 検出器を用いた陽子・反陽子コライダーでの実験は複雑で高度な技術を要した。そのため、500人を超える実験物理学者集団の国際的な協同研究を強力なリーダーシップで率いたカルロ・ルビア

は1984年、シモン・ファン・デル・メル (Simon van der Meer) とともに、ノーベル物理学賞を受賞した (受賞理由: 「弱い相互作用を伝える場の粒子であるW粒子とZ粒子の発見に導いた巨大プロジェクトへの多大な貢献」)。史上、発見から受賞までが最短のノーベル賞受賞となった (参考資料1、2)。

「純粋なる知」を追い求める哲学者や、ある意味では神学者に近いイメージを与える理論物理学者と異なり、ルビアは実験物理学者である。彼は、政治的手腕、強靱な肉体、集金力、そしてタフな精神力が、科学的な才能と同じように重要なものであると信じており、高エネルギー物理学の分野では最もパワフルな男であった。1989年から1993年までCERNの機構長を務めた。

カルロ・ルビアについてのエピソードをいくつか挙げる。
1) ルビアはものすごいエネルギーをもった男だ。暴君的でとても一緒にはやっていけないという人もいる (パブリック・シャーズウイークリー)。

2) 物理学者としての眼識、あるいは政治的な嗅覚の鋭さはよく知られているが、同時に彼は溢れんばかりのエネルギーのせいか、じっとしていることができないことでも有名であった。一つの町、いや一つの国にさえ、一週間以上留まっていることができない。

実際、2つの大陸の間（ジュネーブとハーバード）を毎週のように「通勤」していた。

3)

国際研究チーム「OPERA」は2011年9月、素粒子ニュートリノが「光速を上回る」とアインシュタインの特殊相対性理論と矛盾する実験結果を公表。それに対して再検証チームの報道担当を担当したルビアは「ニュートリノは光より速くはない」と明言。実際、その通り最終的な検証実験で「OPERA」は誤りを認めた。

4)

1985年春、新聞社主催の座談会で素粒子探求の先行きを占い、ルビアは「今から、ビッグス粒子が主人公の長いミステリーが始まる」と語っていた（朝日新聞2013・3、尾関章）。ビッグス粒子は質量の起源とされる素粒子。ルビアの予想通り、今春CERNはビッグス粒子について事実上の発見宣言をした。30年の歳月の大半は、総工費約5千億円の巨大加速器を構想し、建設することに費やされたのである。

注1

・円周が6・4キロもある加速器である。そのなかで加速される素粒子（陽子と反陽子）のビームが正面衝突するコライダーといわれるタイプである。それによって、極微の空間に膨大なエネルギーを集積させることができる。宇宙がビッグバンからわずか10億分の1秒後に実現された約1000兆度もの超高温の状態である。この状態

では電磁気力が弱い力と区別できず、「電弱力」として力の統一状態にあったと考えられる。

注2

・自然界の4つの力のうち、「電磁気力」と「弱い力」が統一できることを説明できるようにした理論。1960年代初期にS・グラシヨウ（参考資料3）がとっかかりとなるモデルを作り、それをS・ワインバーグ（参考資料4）とA・サラムが展開して完成させた。1983年には、ルビア率いる実験グループがこの理論が予言したとおりのウィークボソンを発見し、素粒子物理学で最も成功した理論の一つと讃えられることとなった。

注3

・Zボソンは、Wボソンと共に電弱統一理論の立役者となった、弱い相互作用を仲介するゲージボソンと呼ばれる種類の粒子。Wボソンと違って電荷を持たず中性であるため、Zボソンを仲介するような反応を中性カレント反応とも言う。

参考資料

- 1) Wikipedia、The Free Encyclopedia
- 2) ガリール・トープス『ノーベル賞を獲った男 カルロ・ルビアと素粒子物理学の最前線』朝日新聞社
- 3) 三河アララギ、S・グラシヨウ、P40、第59巻、第10号（2012）
- 4) 三河アララギ、S・ワインバーグ、P40、第59巻、第6号（2012）

短歌に詠まれた茂吉―あるいは茂吉を詠んだ歌人―

「月虹」 鮫島 満

九 佐藤佐太郎 2

先生はいまだ病みふしみたまはん雪きえて梨の花さ
くころか

『立房』昭和二十一年

菜萸の実はいまだも青く旅にある童馬山房先生こほ
し

「童馬山房先生」（茂吉）が「旅にある」というのは東京の自宅を離れて大石田に住んでいることをいう。この時、作者は、茂吉の「旅」は東京に住むことのできない流亡ともいうべきものであり、さらに、勝利を信じて量産した戦争詠への忸怩たる思いに苦しむ旅であるという理解があつたのではないかと思う。

二首目。菜萸の実から茂吉を偲ぶのは茂吉が菜萸の実を好んでいたからである。茂吉歌集『暁紅』には「胡頹子を愛する歌十三首」があり、「赤々と色づきそめし菜萸の実は六月二日に十まり七つ」「うつせみの吾見つつゐる菜萸の実はくるきまで紅きはまりにけり」「百あまり濃きくれなるにしづまれる菜萸の実こほし朝な夕なに」等を読むことができる。

寒き風ふくみ苑にて先生はあゆむ足よわくなりたま
ひつる

『帰朝』昭和二十五年

茂吉が山形大石田から帰京したのは昭和二十二年であつた。茂吉はこの歌が詠まれた二十五年七月に心臓喘息に襲われ外出がままならない状態になっている。歌は、それ以前に明治神宮の「み苑」を共に散歩したときのことを詠んだものと思われる。結句「よわくなりたまひつる」の連体形止めに佐太郎の落胆がこもっている。

みいのちは今日過ぎたまひ現身の口いづるこゑ聞く
こともなし

『地表』昭和二十八年

しづかにてありのままなる晩年の時すぎしかばみ命
終る

茫茫としてたよりのなき境涯をみつから歎き歌ひたま
ひし

健かにいましたたまひて火のごとく言葉かがよひし頃
をぞ思ふ

うつしみにいまし給ひて作らししみ歌おもへば尊く
もあるか

かなしみをうちに湛へし一生にて過ぎしをぞ思ふお
ほけなけれど

ありがたきえにしによりて現身の君の言葉をいくつ

聞きけん

小題は「斎藤茂吉先生逝去」である。三首目は茂吉晩年の作、「朦朧としたる意識を辛うじてたもちながらにわれ暁に臥す」「茫々としたるころろの中にあてゆくへも知らぬ遠のこがらし」「おほろなるわれの意識を悲しみぬあかつきがたの地震ふるふころ」「いつしかも日がしづみゆきうつせみのわれもおのづからきはまるらしも」「つきかげ」等を指しているだろう。佐藤志満には、

「茫々としたる心」と詠みませる斎藤先生六十年代か

『黄柑』

がある。

七首目は、昭和二年十八歳にして初めて茂吉に会って以来の深い縁を偲んでいる。「君の言葉をいくつ聞きけん」とあるが、心から師を慕う弟子はそのありがたい言葉を『茂吉随聞』その他に記録することを忘れなかった。

借財をして建てしわが家の二階より見ゆる童馬山房

焼跡のあたり

『地表』昭和二十九年

佐太郎が昭和四十六年に目黒区上目黒に移るまで住むことなる港区青山南町に住み始めたのは昭和二十四年であった。そこから、昭和二十年五月の空襲で全焼した

茂吉の家、脳病院のあたりが見えるというのである。十代のころから折あるごとに通ったその家が茂吉の姿とともに目に浮かんだだろうことを思わせる歌である。

亡き人の嘆き立ち見し鴨山は若葉あかるくなりけ
るかも

浅草寺境内に来てさまさまの人おもひ出づ岡麓など

『地表』昭和三十年

夏蟬のごときそのこゑ秋分の近江蓮華寺に蟬ひとつ
啼く

同 昭和四十六年

一首目は島根県湯抱の鴨山歌会に臨んだときの作で「石見鴨山」と題する。「亡き人」が、「石見のや高角山の木の間よりわが振る袖を妹見つらむか」(『万葉集』)と詠んだ柿本人麻呂を指すのか、人麻呂研究を『鴨山考』としてまとめた茂吉を指すのかは特定できないが、作者の胸中には両者が存在したと思われなくもない。

二首目の浅草寺、三首目の近江蓮華寺はともに茂吉に縁の深い寺である。

夏の日に聴禽書屋は戸をとぎす時ゆきて桂の木も人
もなし

『開冬』昭和四十七年

葛の花ちりて夏ゆく今宿の薬師堂に来つ亡き人のあ
と

楽しい時間 6

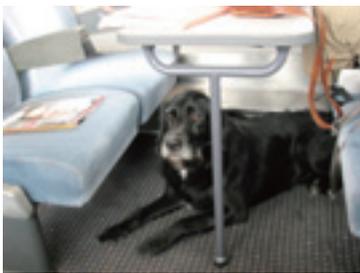
山本紀久雄

2013年3月31日

3月の「辻照子先生の料理とマナー」教室は欠席した。理由は3月10日に開催されたマサチューセッツ州ボストン・シーフード・ショーに参加したからで、今回はここでの楽しい時間を報告したい。

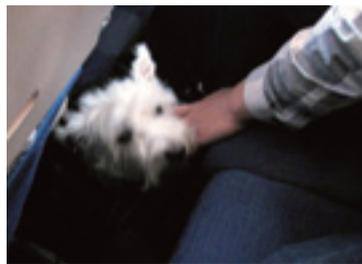
ボストンにはロスアンゼルスから向かったが、エア757の座席は狭い上に満席、西海岸から東海岸へ5時間半かかる大陸横断飛行で、時差も3時間ある。その機内で犬の頭を撫ぜることになった。その事と次第はまず、ドイツからお話したい。

自宅での毎朝夕、リード（紐）を持ってビーグル犬の散歩をさせるが、この犬、あちこち勝手に動き回り、飼い主の思うようには動かない。犬に引かれて善光寺参りである。犬の散歩をしている同類の方々、殆どが同様で、日本の犬は躰と礼儀が欠けている。ところが、欧米の犬はとてもよく躰されている。この写真は昨年11月に乗ったドイツのICE特急列車内で見た実際の犬の姿である。若い女性が、車内でパソコンを操作している足元に、犬がリードなしで、静かに吠えもせ



をやって、こちらを見ている。自宅のビーグル犬とは大違いのお利口さんで、感動ものなので、許可を得て写真を撮らせて頂いた。

これと同じ体験を再びした。LAからボストンへのエア、三人座席が並ぶ窓側と中央席に若い中国系男女が座り、当方は通路側。LA空港を出発して一時間程度経ったとき、突然、窓側の男性膝の間から白いモノが出てきて、それが動く。アレっと思いつめると、ブルッと頭を振ってあくびする。犬だ、とびっくりする。吠えもせず、鳴きもせず、水も飲まず、ずっと静かなまま。これにも感動した。世界標準の犬の躰はこうなのかと思いつつ「お利口さんだね」と犬の頭を撫ぜた次第。



LAからボストンに着くと、そこは一面銀世界である。大雪が降って、一時、空港が閉鎖される騒ぎ。当方のエアは雪がやんだ夕方に着陸できたので無事ホテルに辿りつけた。

翌日がボストン・シーフード・ショー。事前に申し込みし、参加料も支払ってあったので、宿泊したホテルのロビーで参加証を受け取り、首からぶら下げ、港地区に位置するコンベンションセンターへ無料の専用バスで向かった。約15分着いた会場は、広さ185700sqft (172595m²)、そこに46万国からの1017社が展示、参加者（バイヤー及び供給者）は19000名以上。

水産物専門では北米最大規模で、魚介類（生鮮・冷凍・活魚介・ブランド品・自家商標品）、加工機械、冷凍機器、解凍機器、品質保持製品、輸送機器、パッケージ機械、調味料各種等が出展されている。日本の農林水産省も2009年から日本パビリオンを出展しており、また、北海道も独自にブースを設けている。

広い会場を速足で一度回り、次にもう一度、今度はゆっくり視点を絞って歩いてみた。その視点とは「日本の生鮮食品の位置づけ」である。結果的に、日本の生鮮食品については、他国の出展ブースをみて理解できた。というのも他国が日本モノと惑わさせるようなネーミングを使っている事例があり、それから判断すると日本製品は高い評価を得ていると理解できるからである。

この実態について農林水産省の担当係長に問い詰めたところ、困った顔をしていたままで、回答はなかったが、国としてこのように商標表示については対策を講じていないといけないと感じる。いろいろ難しい背景はあると思うが、信頼ある日本ブランドを他国が勝手に利用するのは大問題であり、少なくとも会場で注意・クレームをとるなどの対策は必要であると感じた。

もう一つは、地元ボストンに住む日本人女性、農林水産省ブースの手伝いに来ている方からいろいろ伺ったが、彼女の結論は「日本人が魚を扱うところからしか買わない。他の店は危ない」というもの。確かにこれはいえるだろう。

LAでお会いした魚介類卸企業のマネージャー、経験豊富で業務知識がありテキパキと答え行動する優秀な人材とお見受けした彼が語るには、アメリカのFDA食品

医薬品局 (Food and Drug Administration) が、韓国産牡蠣を輸入禁止措置にしたという。

また、韓国はむき身の牡蠣を、使い古した牡蠣殻に入れ、それを冷凍して米国に出荷するという、極めて不衛生な管理が韓国の特徴であるとも述べたので、ボストン在住女性が心配するのもさぞかしと頷いたわけである。

ところで、LAの魚介類卸企業の経営方針は「よいものを探して提供すること。自分の子供・孫に伝えていけるものを探していく」という素晴らしいもので、日本人は素晴らしいと改めて外国で感じ入った次第。

しかし、ボストン・シーフード・ショーはすごかった。とても楽しかった。それは試食のすごさである。どこのブースに行っても食べさせてくれる。日本館も職人さんを日本から連れてきて、目の前で寿司を握って、勿論、何個食べても文句は言わないし、とても新鮮で美味い。喜んで寿司ばかり食べていると、他のものが食べられないくなる。特にアメリカではクマモトオイスターに代表される牡蠣が絶妙な味わいを伝えてくれる。小粒だが舌に甘い自然な香りを残してくれる。これも食さないといけないし、アメリカはサーモンがよいという評判。確かにうまい。その他に世界中のビールやワイン・リキュールもあって、全て無料で昼食をとる必要は全くない。

辻教室をサボってボストンで楽しい時間を過ごしたが、実は、来月も仕事で欠席となる。二カ月もサボタージュすると、みどり監督から指示を受けられなくなるかもしれないし、辻先生の対応も少し変わるかもしれない。多分、大丈夫だと思いつつもちょっと心配だ。

贈呈誌

秋田アララギ 四月号 窪目とし

食欲のなきなどと言つては居れぬわれなすべき事あり狙すゑる

眞野ミチ

右の手にすばやく汗を吹き払ひ引き籠りの子ら太鼓打ち合ふ

愛媛アララギ 四月号 高津明児

鳥が音も虫も聞き得ぬ我が耳に雷の音の容赦なきかも

宮田規子

足軽く人らのぼれるみ社の石段に我は手摺にすがる

鹿児島アララギ 三月号 月精 薫

雨あとのしめりし土に吾が蒔きし不断草一斉に芽の出でて来ぬ

浜畑松枝

過不足のなき日々なれば尚思ふ遠き被災地の再びの冬

高知アララギ 三月号 廣見正子

しみじみと命を想ふあけぼの杉散りてきらめく没り日のなかに

小松桂子

携帯のメールの数が会話より多くなりたり娘と吾は

群山 三月号 海輪美代司

君たちに感謝あるのみ夏休み一週間をひ孫とあそぶ

山家常雄

荒々しく夕べの風の吹き過ぐる木下にいくつ万年青の朱実

檜の木 三月号 杉山永代

準備して置きたる栗飯炊きあげて久々の子と遅き夕食

滝朝江

地下道を渡りて上る階段に赤きマニキュアのサンダルが来る

穂の原 三月号 松井花子

風もなく細き冷たき雨しきり今日は雨水とふテレビの前に

俳誌「かさね」 三月号 佐藤喜仙

早暁の白菊二輪冴えなくと

「鍼はりの如く」其の一 夏 目 勝 弘

長塚節の代表作であり、教科書にも多く採用されている一首でもある。

○白埴の瓶こそよけれ霧ながら朝はつめたき水汲みにけりから始まる「鍼の如く」のこの一首に対しては、多くの歌人その他の著名人の評がある。

参考にすることも出来るが、自分はただ素直に一首一首から何かを感じたい。

そこで作られたその背景等を、年譜・手紙等を歌と併記してみることにした。

年譜より、大正三年三月十三日上京、十四日神田錦町の橋田病院に入院、四月五日上京の久保博士に診察を受ける。

その夜ふと歌ができ、そして六日も作り七日は歌を推敲する。そして赤彦の手紙の返信に歌一首がある。

「鍼の如く」其の(一)五の詞書に

病院の生活も既に久しく成りける程に四月廿七日、夜おそく手紙つきぬ、女の手なり

○春雨にぬれてとゞけば見すまじき手紙の糊もはげて居にけり橋田病院に入院してより歌が少しづつ出来るようになり

五月一日、久保夫人に宛て「秋海棠画賛の歌只一首あります」と報ずる。

詞書に五月六日、立ふぢ、きんせん、ひめじをんなどくさくの花もて来てくれぬ、手紙の主なり、寂しき枕頭にとりもあはず。

○薬壺さがしもてれば行春のしどろに草の花活けにけり

「詞書」、草の花はやがて衰へゆけども、せめてはすき透りたる壺の水のあたらしきを欲すと

○いさゝかも濁れる水をかへさせて冷たからむと手も触れてみし「詞書」いつの間にか、立ふじは捨てられ、きんせんはぞろりとこぼれたるに、夏の草なればにや矢車のみひとりいつまでも心強げに見ゆれば、

○朝ごとにつつと減り行くに何が残らむ矢車の花

(以下三首は略)

「詞書」五月十日、復た草花もて来てくれぬ、鐵砲百合とスウキトピーなり、さきのは皆捨てさせて心もすがすがしきに、いつのまにか大きな百合の蕾ひそかに綻びたるに

○心ぐき鐵砲百合か我が語るかたへに深く耳聞き居り

「詞書」、十一日の夜に入りはじめて百合のかをりのたかきを聞く、此夜ものおもふことありけるに明日の疲れおそろしければ、好まざれども睡眠剤を服す、入院以来これにて二度目なり

○うつゝなきねむり薬の利きこゝろ百合の薫りにつゝまれにけり日記に「彼女の帰りし後はいつも心中に泣く」と、前日五月十日は門限の九時まで彼女が居た。

「詞書」、熱少したかけれどもたま／＼出でありくこともあり

○あかしやの花さく蔭の草むしるねなむと思ふ疲れごゝろにこうしてただ書き写してゆくのみで、胸が重く痛む思いがある。

目前のものを写生し語句としたその五七七七七の各語句に、真なるオモイが痛いほど感じられてならない。

五月二十二日、ついに兄黒田昌恵氏よりてる子との交際を拒否される。

五月二十九日、赤彦に付添われ退院。三十日雨の中を帰郷する。

「氷魚」のことから (148) 岡本八千代

季は巡ってまた過ぎてゆく。

東日本大震災より二年をすぎた。外国では恰も「イタリヤの守護聖人フランシスコ一世」としてローマ法王後継者が決まった。

今朝めざめて起きたら、紅梅の花びらが庭一面に散っている。普通に一日がすぎて普通にはじまったような私の春。子規の短篇小説「花枕」のことを書くこうとする。

「花枕」の作者は「正岡のぼる」――(新小説 第二年第四卷 明治30・4・5)

上。―神の工が創り成した千仞の絶壁、三方は木の林、東に向って開く一方は人家の群。屈曲した川の流。そこに飛んできたものは、美しい神の子二人。白い羽の一人と黄色の羽の一人。二人は話し合う。

白羽「匂よ。葦、苧環、桜草、丁子草、五形、華鬘草の類は皆此方に裁えて枕元を飾るべし。」

黄羽「それこそ善からめ。吾は此方に蒲公英、母子草、金鳳花、金仙花、福寿草など裁えんは色彩如何に。見よ、光よ。色彩善からずや。」などと。

中。―綴れの着物をまとい、拾った落葉が少しばかり入っている籠を背負い、熊手を持って、森の中を歩いてゆく十四五の少女があった。少女は、垢がついていてよこれているようだけれど、なんとなく気高く気品があつて、「世の外の神にやあらん」ほどであつた。

この少女には妹があつて、二人とも継母に折檻せられ

る身であつた。しかし、姉は妹を、妹は姉を思い合つていた。

下。―また「匂」と「光」の登場。そして、男神と女神も登場。男神は、光と匂の二人をつれて人間界に遊ぼうとして下界に降りようとする。

女神は、光と匂の二人に、「心して善きほど遊べ」と注意した。―男神は、光と匂に導かれて、下界へと下りた。

下界(人間界)は暗いと言いながらもかの少女を連れ去ろうとする男神たち。そして、「眠れ」の曲を二人に楽器を奏でさせて、男神は花の上を下り、少女のようすを窺つた。

二人の奏でる曲は、あたりに響く。

「ねむ、ねむ、ねむれ。眠れと汝を さこそう、吾。」
神は、次に「洗へ」の曲を奏でさせる。

「洗へよ、洗へ。洗いあげたる汝が体、白玉椿白き肌。」

神は、洗い終わって、少女の額に吻を当てた。次に、「覚めよ」の曲を奏でさせた。

「覚めよ、覚めよ。眠るは何処の 賤者、覚めなば神の 天少女。」

神と神の子は少女を誘いつつ楽を鳴らして次第に高く上れば少女も上り来た。しかし、少女は妹のことを想い出し、妹を連れに来ようとして、ついに、本の花の上へ落ちた。「始めて夢見たる心地に惘然と佇ずむ足下、今しも地を離れたる許りの赤き丸き月一つ。」(了)

この小説、まるでアニメ映画を見ているような空想から来て読み了つた。子規の優しい美しい描き方を感じつつ。

ことのはスケッチ (413)

今泉 由利

『牧野富太郎博士』

小・中学生の頃の夏休み、牧野富太郎博士を習い、自宅の庭の範囲だったけれど、植物採集をした。新聞に挿み、重い本など重しにし、二・三回新聞紙を取り換え、完全に乾くと、きれいな紙に移し細く切った紙で所要箇所を止めた。草、木、花を乳鉢でつぶし、水に溶き、それぞれの色調で遊んだ。そんなことばかりしていた。後、東京に住むと、練馬の「牧野記念庭園」を訪ねた。博士が命名された。センダイヤザクラの咲く時、博士が奥様の名を付けられた。スエコザサにも出会えた。

この頃、上野の国立科学博物館に於て、「牧野富太郎展」が開催された。

父や母の居た昔にかえれたような、なつかしい気持ちにあられた展示だった。

そこで、博士が和歌、俳句を詠まれたことを知る。

：家守りし妻の恵みやわが学び：世の中のあらんかぎりやすえ子笹：（奥様を詠まれた）

○朝夕に草木を吾れの友とせばこころ淋しき折ふしもなし

○我が姿たとへ翁と見ゆるとも心はいつも花の真盛り

○いつまでも生きて仕事にいそしまんまた生れ来ぬこの世なりせば

○布にすりし昔の里のかきつばた（カキツバタの花デハンカチを染められた時の作）

博士十七歳の勉強心得「楮鞭一撻」（抜粋）

①忍耐を要す 植物の詳細は、ちよつと見たくらいで分かるようなものではありません。

②精密を要す 不明瞭な点があるのを、そのままにしてはい

けません。

③草木の博覧を要す 草木を多量に観察しましょう。

④書籍の博覧を要す 出来る限り多くの書を読み、自分自身の血とし肉とし、それを土台に研究をしましょう。

⑤植学に関係ある学科は皆学ぶを要す 植物の学問をする場合、物理学や化学、動物学、地理学、農学、画学、文章学などの学問もしましょう。

⑥洋書を講ずるを要す 現在の時点においては、そうであっても永久にそうではありません。

⑦当に画図を引くを学べし 生態を描写するのに最も適した画図の技法を学べし。

⑧宜しく師を要すべし 先生と仰ぐのには、年の上下は関係ありません。

⑨吝財者は植物たるを得ず けちけちしては植物学者になれません。

⑩跋涉の勞を厭ふなかれ 植物を探して、山を登り、川を渡り、沼に入り、しんどいことを避けては駄目です。

⑪植物園を有するを要す 遠方の珍らしい植物も植えて観察しましょう。

⑫博く交を同士に結ぶ可し お互いに知識を与えあうことにはよつて、知識の偏りを防ぎます。

⑬適言を察するを要す 職業や男女、年令のいかんは、植物知識に関係ありません。

⑭書を家とせずして、友とすべし 本は読まなければなりません、しかし書かれていますことがすべて正しい訳ではないのです。過去の学者の誤りを正してこそ学問の未来に利するものでしょう。

⑮造物主あるを信するなかれ 神様は存在しないと思いなさい。神の偉大なる摂理であると見て済ますことは、真理への道をふさぐことです。

編集室だより（二〇一三年 三月）

○ドナルド・キーン氏。ニューヨーク出身。日本文学者、日本文化研究の第一人者。コロンビア大学での最終講議を終えられた後、日本、東京、北区に永住、帰化された。

キーン氏は、滝野川図書館に図書を寄贈されました。近所に住むゆえ、図書館に通い、読ませていただいて、気付きました。ドナルドキーン氏に「三河アララギ」をお送りしよう。

去年一年間の十二冊をお送りしました。『分かり易い内容の面白い歌が多いように思いました。これからゆつくり読むことを楽しみにしています』と、すぐ返事を下さいました。それから後、厚かましくも毎月の「三河アララギ」をお送りしています。大きな励みにさせていただいていません。

○立川、昭和記念公園、春が始まる風景。

○「楽しい時間」山本紀久雄氏と「料理とマナー」の辻照子先生と仲を取り持って下さった蓮沼祐二さん、蓮沼みどりさんと「楽しい時間」のミーティングをしました。アペリ

テイという素晴らしい「時」を確認しあいました。

○国立科学博物館。牧野富太郎展。

○「かさね」俳句誌の同人、川井素山氏、本郷宗祥氏、丸山酔宵子氏、田中清秀氏、佐藤喜仙氏。編集室を訪ねて下さいました。良い時が流れ「俳句」からエネルギーを沢山いただける予感がありました。

○東京国立博物館。円空展

○伊豆高原、万華鏡館。

○徳川吉宗、享保（一七二〇）の改革に於て、庶民のために造園された飛鳥山。桜も人も満開。

○元文（一七三七）、武蔵野新田世話役、川崎平右衛門が幕命により植えた小金井公園の桜。おだやかに平和に満開の下に。

○石神井川、板橋区から北区にかけての川岸に千本を越える古木桜木。咲く桜、吹雪く桜、積った桜。加賀前田藩のなごり。

○身延山に登る下る。どこもかしこも枝垂れ桜。天国に辿り着いたかな。

和菓子街道 (79)

<http://www.trad-sweets.com/>

平松温子

伊勢街道(2)

伊勢街道の旅の出発点、日永の追分。数軒の茶屋が立ち並び、旅人はみなここで休憩して身支度を調えたり腹ごしらえをしたようだ。

追分の名物は「まんじゅう」だった。中でも、『東海道中膝栗毛』の弥次さん喜多さんのおかげで一躍有名になったのが、鍵屋のまんじゅうだ。弥次喜多ふたりは鍵屋で居合わせた金毘羅参りの旅人と饅頭の食べ比べをして大敗。でも、実は金毘羅参りの旅人は懐に饅頭を入れて食べたフリをしていたのだとか。

鍵屋は今はないが、追分近くの岩嶋屋が、江戸時代の名物に因んだ酒饅頭の「追分まんじゅう」を作っている。岩嶋屋は県内の菰野という地で天保8年(1837)に創業した饅頭屋から暖簾分けした店で、酒



饅頭の酒素も江戸時代以来、継ぎ足してきたものを譲り受けて使っている。酒の香りがふんわりとする皮はしっとりとしていて、小麦の自然な甘みがある。これならずるをしなくても弥次喜多に勝てる気がする。

餡は甘さ控えめ。香り高い皮を味わう饅頭だ。

◆岩嶋屋

住所：三重県四日市市追分3丁目4-5

電話：059-345-0407

お知らせ

▽六月号の原稿は、五月一日(水)までに、必着、郵送のこと。

※毎月の原稿が、期日までに到着しないと、編集に支障をきたします。郵便の休配(日曜、祝日)を考えあわせて早目に送付してください。

※掲載ずみの原稿は毎月の三河アラギ誌と共に返送しますので、返信用封筒は不用です。

原稿の送り先

東京都北区王子本町一の二六の六A
〒一一四一〇〇二二 今泉由利

※原稿用紙は、二百字詰(20字×10行)を使用し、文字はわかりやすく楷書で濃く大きく書いて下さい。

編集後記

今年桜の花の開花が例年より早かったようですが、これは、結果的には冬が温かかったのか、と思いきや、例年のない豪雪のニュースも届きました。寒かったのか温かかったのか……。ともかく春になり庭の宿根草は斉に芽を出し、花を咲かせ始めました。ごく自然な現象として季節は巡ってきます。自然現象に逆らうのは人間だけかもしれません。

しかし、それがまた、人間が人間たる所いかもしれませんね。

△四月十八日に行われた「六十年周年記念歌会」六十年という歳月の積み重ねの偉大さを改めて実感しました。今後、七十年、八十年と息長く続くことを願ってやみません。(平松)

三河アララギ規定

◇「三河アララギ」に短歌を寄稿する者は、「三河アララギ」会員であることを必要とする。
◇規定の会費を送金すれば、すぐに会員になることができる。

◇会員には毎月歌誌「三河アララギ」を送付する。

◇会費は、平成十年一月一日より、半ヶ年分一万円、一ヶ年分二万円の割で前納されたい。ただし、購読会員は、半ヶ年分二千元、一ヶ年分四千元とする。

◇会員は、住所変更の際は、すみやかに通知せられたい。退会の際も同様ただちに連絡せられたい。なお、退会の際の既納会費は、返戻しない。

◇会員は、発行所開催の諸会合に自由に出席することができます。

◇会員は、短歌・その他論文・随筆等を送稿することができる。毎月一回一日締切り厳守。なお原稿は一切返却しない。ただし返送希望者は返信用封筒の同封があればお返しします。

平成二十五年四月二十五日印刷 第六十巻 第五号
平成二十五年五月一日発行 定価 六百元

編集部

岡本 八千代・小野 可南子・夏目 勝弘

平松 裕子・山口 千恵子

発行人

今泉 由利

発行所

三河アララギ会

URL

豊川市 御津町 御馬 西三七

印刷所

T E L (〇五三三)七五二〇〇九

振替口座

〇〇八三〇一六一五六三三九

E-mail

yuri188@cronos.oon.ne.jp

Homepage

http://maizumiyuri.jp/

株式会社

核 創 美